誤解

魂の導き役とトラの幽霊と恐ろしい母

第1巻

オーウェン・ジョーンズ著

TEKTIME

目次

Section 1
著作権
お問い合わせ先
サイキックミーガンシリーズ
献辞
謝辞
魂を揺るがす言葉
特別オファー
1　ホブソン家の選択
２　芽生える自覚
３　母の小さなお手伝いさん
４　霊感
５　近所の人たち
６　メーガンの友人たち
禁断
著者の他の作品一覧

著作権

Copyright © Owen Jones 2024

誤解

オーウェン・ジョーンズ著

発行所　メーガン出版サービス　クリエイトスペース

本書における著作権は、１９８８年著作権・意匠・特許法第７７条及び第７８条に従い、オーウェン・ジョーンズ氏が有するものとします。著者の道徳的権利をここに断言します。

この作品はフィクションです。登場する人物・事象は、著者による架空の産物であり、実在のものとは関係ありません。実在の地名が登場することもありますが、事象は完全にフィクションです。

1　ホブソン家の選択

メーガンは、今にも泣きそうになりながら、また石炭貯蔵室に閉じ込められていた。彼女はまだ１２歳で、母がなぜこんな酷いことをするのか理解できなかった。前にも六回ほど同じような事があったが、おそらく父はこのことを知らないだろうと思う。彼女から父に打ち明けたこともないし、母が言うはずもないからだ。

　メーガンと母との間には、お互いを失望させないようにするという暗黙の了解があった。そのはずが、また彼女はこの土と埃と彼女をジロジロと見回す得体の知れない恐ろしい生き物たちだらけの貯蔵室に座っているのだった。

　彼女には、分からなかった。真っ暗な中、泣かないようにするのと、母にここから出してとすがらないようにするので精一杯だった。以前、母にすがったことがあったのだが、母は彼女を部屋から出す代わりに、到底果たせないような条件を提示してきたのだ。どんなに頑張っても果たせないような条件を。

　時々、母との暗黙の了解について、メーガンだけが真摯に受け止めてるように思えた。

　メーガンの努力とは裏腹に、涙が再び彼女の頬を流れ落ちた。埃だらけの顔に見えない川床を作るように、煤だらけの制服を洗い流すように。やりすぎだ。本当にやりすぎだったのだ。彼女をこれだけ理解しているはず人が、なぜこの一人娘に対してこんなに酷い事ができるのだろう。

　母が通りすがりに掃除機をわざとドアにぶつけたので、メーガンは思わずびくっとした。安心できるようなほんのわずかな光すらなかったので、積み上げられた石炭の中を壁まではって進み、そこから右へ部屋の角に到るまで移動することで、彼女はなんとかして自分を落ち着かせた。

部屋の角に着くと、気味の悪いものが這い上がってこないように、ロングスカートの裾を足に巻きつけ、足の下にたくし込んだ。ブラ

ウスのボタンを上まで留め、靴下を引き上げ、セーターで頭を覆い、両手を袖の中にしまい込んだ。メーガンの知る限りでは、これが石炭貯蔵室に居つく何者かから身を守るのに一番安全な方法なのだ。彼女は幽霊やその手のものは気にかけていなかった。まぁ、それはそれで問題ではあるのだが。彼女は、それよりも虫が這い上がってくるのが嫌だった。虫に噛まれて血を吸われることを考えるとゾッとした。蜘蛛も嫌いだ。けれど、まるでサナギになったかのように制服に包まれていれば、虫たちが這うことができるのは、靴下の上のたった数インチあるかないかの部分だけのはずだ。正確にいえば、数平方インチほどの部分。それというのも、彼女は両腕でふくらはぎが太腿にくっつくほどきつく抱き抱えていたからだった。

　メーガンは、なんとか泣き止めたらいいのにと思った。ほんの少しの間でいい。ただ、そこから解放されるのを待ちながら、彼女は最終的にその時が来るのは分かっていた。そしてその時というのがいつ頃になるのかも。５時半頃、つまりそれは、父が仕事から家に帰って来る前に、母が３０分間の片付けを終えている時間だった。

　メーガンには、母がなぜこのようなことをするのか分かっていた。母は怖がりで、メーガンはそうではないからだ。メーガンから見た母は怯えており、だから娘も自分と同じように怯えて欲しいのだ。問題は、メーガンが怯えていないことだった。怯えなければいけないものがないのだ。彼女は母に何度も何度もそう訴えたが、そうすると、母はただ比喩的に黙ってしまうこともあれば、今回のように文字通り口をきかなくなってしまうこともあった。

　メーガンの両親はカトリック信者だったが、母はとても敬虔なカトリック教徒で、父親はそこまでではなかった。彼女は善きカトリック教徒であり、このままカトリック教徒としての務めを全うする限り、天国へ行くことは確定しているのだと思っていた。ということは、自身には言わないまでも、死後の世界を恐れていたのだ。

問題は、メーガンの思う限り、母は自分の娘を石炭貯蔵室に閉じ込めることも彼女の務めと思っていることだった。だから、今こうしてここに閉じ込められているわけだ。
　父もカトリック教徒として生まれたが、母ほど敬虔というわけではなかった。彼は、地獄に落ちて天罰を受けるような行いをするのも、その人次第という考えだった。彼は自分自身と愛する者の心のあり方は気にかけていたが、例え幼い少女であっても、ある程度選択の自由は持つべきものと信じていた。
　メーガンは両親ともに愛していた。たとえ何をしようとも、母が心の底では大切にしてくれていることに、彼女は幼いながらも気付いていた。だから、両親とも同程度に愛そうと努力さえしていたのだ。だが問題は、メーガンに言わせれば、母があまりいい教えを受けてこなかったか、怖がりすぎて自身の目で見たり、耳で聞いたり、感じたりしたものを信じられなかったことにあった。
　メーガンは、両親とは何なのかよく分からなかった。ただ彼女には両親がいて、他の子たちにも同様に両親がいるということくらいはわかって分かっていた。しかし、彼女の母はそのことを認めなかった。つまり、彼女は他の子たちにちゃんとした両親がいると信じたくなかったのだ。「結局のところ、」と母は彼女に言った。「私は３４歳で、あなたはたったの１２歳。私はカトリック系の学校で勉強したけど、あなたは諸宗派の総合中学に通ってるだけじゃない。」
　母が総合中学の教育課程を問題視しているわけではないのは明らかで、その代わり『諸宗派』という言葉を吐き捨てるように口にしていた。メーガンには、諸宗派の何が問題なのかさっぱりわからなかった。彼女は学校で、良い生徒にも悪い生徒にも会っていたし、聡明な生徒もそうでない生徒もいた。そして、聡明でない生徒たちは、ほとんどどの宗派にもいたのだ。

母は、心の底では善良で、聡明で、そこそこ物分かりの良いタイプ。
父は、善良で、聡明で、まぁまぁ物分かりの良いタイプ。
そしてメーガンは、善良で、それなりに聡明で、すごく物分かりの良いタイプだと自身を分析していた。
それが、彼女の問題だったのだ。だから、彼女はたった今こうして、漆黒の石炭貯蔵室の片隅で、おそらくありとあらゆるものが彼女の上を這う中縮こまることになってしまったのだ。そう考えて、彼女はゾッとした。だが、彼女が最初からそうと知っていたように、すすり泣きは止まっていた。
彼女には二つの選択肢があった。
一つは、父に彼の知らないところで彼女に何が起きているかを伝えることだ。それは、もしかしたら離婚の原因になるような口論になるかもしれないし、結果として彼女は施設に送られるかもしれない。もう一つは、彼女がいつもしているように、気付かないふりをすることだった。
メーガンはこれまでの経験から、石炭貯蔵室に閉じ込められた時には、何か別のことを考えるのが最善の策だと学んでいた。彼女は友人たちのことを考えるのが好きだった。彼女にはそんなに多くの友人がいたわけではないが、彼らは彼女にとって特別な存在だった。彼女の一番大好きな友人は、祖父とワシンヒンシャと彼女の飼い猫だった。
彼女は目を閉じて、リラックスし、彼らが自分の前に立っているか、もしくは横に座っている様子を心に描いてみた。こうすることがいつも彼女の心を暖かくしたので、感情が乱れているときはいつでもそうするようにしていた。それは物事がうまくいかない時に、彼女がするおまじないの一つだった。
メーガンはふと何かが太腿をさすり、セーターを通して低い音がくぐもって聞こえたような気がした。

彼女は、一瞬凍りついた。

2　芽生える自覚

全ては、彼女がよちよち歩きの幼児期に始まった。両親は共に働いていたので、彼女は日中母方の祖母に預けられていた。母の両親は古典的なタイプで、夫が外に働きに出て、妻は子どもたちがすでに結婚して出ていってしまった家に残って、家の周りのことを手当たり次第にこなしていた。彼女の祖母であるホワイト夫人には、彼女自身の友達が全くいなかった。彼女の知り合いは、皆夫の友人や妻だった。それで彼が亡くなった時、ホワイト夫人には事実上友人が全くいなくなってしまったのだ。

　ホワイト夫人は、それまでに何度か寂しさと退屈さから自分がおかしくなってしまうんじゃないかと感じていた。

　そのため、日中そして時には夜もメーガンの面倒を見ることになったのは、天からの贈り物のようだった。ホワイト夫人は、おかげで退屈さから頭がおかしくなりそうになるのが治まったことを多くの人に伝えたがっていたが、何年も経った後に振り返ってみると、もしかしたらメーガンを見るようになった頃には実はもう手遅れで、その予兆はすでに始まっていたのではないか、とメーガンは思うことがあった。

　最初に何だかおかしいと思われることがあったのは、メーガンがまだ赤ん坊の時だった。メーガンがおもちゃや何かを左手で取るようになったのだが、それはホワイト夫人にとってはとても行儀の悪い仕草だったのだ。最初ホワイト夫人は、単にメーガンが掴んだものを右手に渡し「左手はダメ、右手よ。」と言うだけだったが、数週間が過ぎて、メーガンがまだ正しいやり方を学習していないようなら、左手はだめだと注意するのに加え、その左手を叩くようになった。

　その歳頃の子が大抵そうなるように、厳しい条件反射の躾を受けて、メーガンは右手を使うことを学んだ。祖母は、メーガンが躾に順応したことをとても喜んで、ある日そのことに気付いていなかった自分の娘に、メーガンは以前左手でものを掴む癖があったのを必ず右手で掴むようになったと、良い知らせだと言わんばかりに誇らしげに報告した。
　メーガンの母スザンヌは、そのことについて何も思うところはなかった。彼女は、自分の母がちょっとおかしなことをするのは知っていたし、したいようにさせていた。ただ、彼女が覚えていなかったのは、自分も同じ躾を母から受けていたということだった。もしそんな躾を受けていなければ、違ったタイプの人になっていたかもしれない。第一に、左利きになっていたかもしれない。
　スザンヌは、夫ロバートにはメーガンが生まれつき左手を使う傾向にあったことは言わなかった。彼自身が左利きで、しかもそういう古臭い風習に縛られていなかったので、彼はそういう躾は認めないだろうという理由で、彼女はその事実をなかったことにしていたのだ。ホワイト夫人がロバートのことを認めなかった理由の一つが、彼が左利きだったことだ。彼女は、彼と彼の魂を救うのにはもうすでに手遅れだとみなしていた。
　彼女は、スザンヌがロバートに恋に落ちて、終いには結婚などしてしまわないようにできることは何でもやった。ガミガミと小言を言ったり、外出を禁じたり、多くもないお小遣いをあげるのをやめたり、階段下の箒入れに閉じ込めたりさえした。
　「私の娘ともあろう者が、そんな素行を取るなんて信じられないわ。」と箒入れの前を通る度に、彼女はドアを叩きながら中に向かって叫んでいた。「病院で、赤ん坊の取り違えがあったに違いないわね。あなたのような子が私の娘のはずないもの。」
　それでも、スザンヌはラッキーな方だった。彼女の育った家には石炭庫はあったが、石炭貯蔵室はなかったのだ。ただ彼女にとって

は、ティーンになってからでも箒入れはとても恐ろしい場所だった。メーガンと同じような理由で恐れていたのもあるし、実はそれ以上の理由があった。ホワイト夫人は、箒入れの中には『鬼や悪魔』がおそらくいるだろうとほのめかしていたのだ。こういうことがある度に、スザンヌに隅に静かに座って頭を覆っているように教えた。『そうすれば、鬼や悪魔は彼女に気付かないはずだから』と。

　メーガンが言葉を話し始めた時、ホワイト夫人はそれは自分の手柄だと思っていた。彼女は、スザンヌやロバートが育児をしているとは全く認めていなかったのだ。いわゆる『最近の親たち』は子どもたちと過ごす時間がなく、祖父母がいなければ次の世代は全くのおバカさんになってしまうと、友人に言いふらしていた。

　ホワイト夫人の知り合いたちは彼女がどういう人なのか分かっていたので、頷いて見せかけの同意を示したり、話題を変えたり、できる時にはさっさと立ち去ったりしていた。そういう時の会話は大体このような感じに進んだ。

　「まぁ、幼いメーガンの面倒を見て娘さんを助けているなんて、ホワイトさんは本当に偉いわ。ところで、今年のベゴニアのできはどう？」

　そういうわけで、幼いメーガンは祖母の突飛な行為の元に放置されていたのだ。ホワイト氏はもうこの世にはおらず、彼女の空想を気にかける人もいなかった。ただ、それが必ずしもそうではなかったようなのだ。ホワイト夫人の足元に座りながら、メーガンはおもちゃを持ち上げて、それを『おじいちゃん』に差し出すことが時々あった。

　最初、ホワイト夫人はこの子は混乱しているのだと考えていた。彼女は父方の祖父母がこの子を混乱させていると思い込んだ。それで前にうまくいった躾方法を思い出し、メーガンがおもちゃを持ち上げて『おじいちゃん』と言う度に、彼女からおもちゃを取り上げ

て『おばあちゃん』と言った。それから時が経ってもっと切迫してくると、『おばあちゃんよ、メーガン。おじいちゃんじゃないの。』と言って足をパチンと叩くのだった。
　しかし、どんな方法を試してみても、彼女に右手を使わせるようにしたように、メーガンに『おじいちゃん』ではなく『おばあちゃん』と呼ばせるのは難しかった。それに、メーガンは『猫ちゃん』と言って、何もないところに手を振りかざしたり、くすくす笑ったりすることもあった。
　メーガンが『猫ちゃん』や『グルル』という言葉なんかを口にし始めた時は、ホワイト夫人は子供の想像だと片付けることができたが、『おじいちゃん』と言うのには閉口してしまっていた。ある日、彼女はメーガンがロバートの両親を何と呼んでいるのかスーザンに尋ねてみた。
　「あら、メーガンったらかわいいのよ。彼らのことをウェールズ語でおじいちゃんとおばあちゃんっていう意味の『ナインとタイド』って呼ぶの。彼らはメーガンが大きくなったら、ウェールズの学校に入れたがっているんだけど、ロバートと私はまだ決めかねているのよね。お母さん、どう思う？」
　ホワイト夫人は、メーガンにカトリック系の学校へ行ってほしかったが、それは万に一つのことだと分かっていた。というのは、左利きのロバートは『子どもたちに宗教的な教えを施すことに前向きではなく、どんな宗教もそんな幼いうちから強制するものではないと考えている』からだった。ふん！何が分かるっていうのかしら。左利きごときに、何が分かるっていうの？
　ただ彼女はこう答えた。「メーガンをどこに通わせるかはちゃんと考えなさいね。左利きの先生たちが、尊敬することを教えなかったり、昔ならではのきちんとした躾をしなかったりするような最近の乱暴な学校には通わせたくないでしょ。一般教育終了試験を受ける前にメーガンが妊娠でもしちゃったら困るものね。」彼女は『左

利き』だとか『尊敬』だとか『躾』のようなキーワードが、彼女の聞きたい答えをスザンヌから引き出してくれると期待していたが、左利きロバートの馬鹿馬鹿しい考えに、娘が傾倒してしまっているのではないかと恐れてもいた。

　こうなると彼女にできることと言えば、メーガンが堕落するのを止めようとすることだけだった。ロバートと、そして自分の娘が、哀れで可愛くて感受性の高いメーガンに起きても構わないと思っている堕落を。彼女は、メーガンを階段下に閉じ込めてしまおうかと考えたことがあるが、ロバートがそれを知ったら最後、二度とメーガンと二人きりにさせてもらえなくなるだろうし、双方にとってよくないことになってしまうのは分かっていた。

　ただ、ホワイト夫人は心の奥底ではしっかりと気付いていた。彼女にとって雲行きはかなり悪くなっていて、彼女の思い通りにはならないであろうことを。

You've Just Finished your Free Sample

Enjoyed the preview?

Buy: http://www.ebooks2go.com